

# Costume in SAYURI

## 色のダンス——この映画そのものが、まさに動く芸術品ですね。

中野香織 ● 服飾史家・コラムニスト

日本という舞台を借りて、日本の物語ではないファンタジーとして映画を見ました。着物も、時代や場所など正確に考証すれば全然違うのかもしれない。でも、それはマイナスの意味じゃなく、積極的にファンタジーを盛り上げる衣装として、圧倒的に見応えのある美しいものでした。女優たちにも【着せられた感】は全然ないですね。

衣装を担当したコリーン・アトウッドは、自分の工房で昔の生地を複製し、仕立てたそうですが、印象に残るのは、やっぱり色ですね。【シカゴ】もそうでしたが、アトウッドは登場人物の性格や立場を、色の変化で表すのがうまい人です。ヒロインの変化で言えば、最初は淡いやさげなピンクを着ていたさゆりが、流し目で通りがかりの男を止めるシーンがひとつの転機になります。紫がかった色を着ていて、ちよっと色気が入ったかな、という感じが出ている。さゆりは水をたたえた女性で、水の流れのように生きる女性として描かれますから、衣装も基本的に美しいパステル調。舞妓、芸者として激動の時代を生きたときは半襟や帯に上手に赤を効かせています。その極みが「春の踊り」で舞うシーンですね。美しさのあまり、見ている気がうしない、そうになりました。幽玄の美のなかに、彼女が秘める激情が表現されていて。ごちゃごちゃ色を入れより白と赤じゃなないといけないかと思うし、あの黒いぼっくりもいい。履物を脱ぐというのは、西洋人にとっては日本人以上に大きな意味があるので、舞台の上で裸足になって激しく踊るといえるのは、かなり官能的に映るんじゃないかと思いました。男爵の家に招かれたときの赤の帯の散らし方も、水揚げされた後で置屋に帰ってくる時も印象的だった。初めて太ももを見せたんですよ、チラッと一瞬。そこでも赤が見えて、「うまい」と思いました。今までそういうことをしなかったのに、あのシーンだけ太ももを強調するかのようには赤を持っていく。昔スペインの女王が落馬したときに、抱えた家来が脚を見ただけで死刑になったり、中国でも満足していたりとか、多くの文化圏で脚にはエロティックな意味がある、ブルータもグレイともいえない、それこそ【水の色】というものがとてもドラマティックに使われていましたね。

初桃の衣装は強烈でした。黒と赤と金メインカラーで、悪巧みをすればするほど、襟の開け方がだんだん大きくなる。半襟がぐっと大きく出て、ちよっとだらしない感じも与えて、それがまた魅力にもなるんですが、アトウッドは「実際の芸者が着ていたものではインパクトが足りない」として、かなり自由に創作した部分もあるそうですが、初桃の燃えるような女の情念を引き立てて支えるには、衣装もあれくらい強くないと、もたなかったでしょう。キャラクターにびびったり合った衣装という意味では、いちばん相性がよかったのではないかと思えます。彼女が出てくるたびに、こちらの血中濃度もバツと上がる。さゆりの水に対して、初桃は炎という感じでした。

豆葉は終始、一歩引いた感じの色合いでした。何色ともいえない色を着ていますよね。これは何色だろうと考えているうちに次のシーンにいくんです。包み込むような、相手を拒絶しない色を意図的に選んだんでしようね。本当は非常に意志の強い人です。すから、凛としているけれどもやさしい色です。

着付けに関しては、ウエストをシェイプしてドレスのような印象を与え、ハリウッド好みにしています。初桃が帯を締めてもらいなから、「もっときつく」と言うシーンもありましたね。着物至上主義の人が見たら、違和感もあるでしょう。でも「女性のセクシーさとはくびれである」というのは、西洋文化では一度も否定されたことではないんですから。私も着るとしたら、ああいふ風に着たいなと思いました。彼女たちは【行動する芸者】です。受身ではない。すと、やっぱり西洋的な、どこか曲線を感ぜさせるシルエットのほうが、行動する女にはよく似合うという気がしますね。

もうひとつ印象的なのが、初桃のチンチナラの毛皮の襟付きコート。これは絶対、日本人の発想ではできない、ゴージャスな着方を目を奪われました。シルクのいちばんゴージャスなドレスでも、この衣装にはかなわないだろうというくらい絢爛としていて。

衣装ではないですが、耳たぶに化粧しているのを見て、女性誌の「NIKITA」も提案していたな、と思い出しました。耳にチークを入れると、上気したように色っぽいんだとか。そういうえば、豆葉による【芸者の艶女テク】もたくさん披露されましたね。手首

の内側を一瞬だけ返してみせるとか、隠されているから見たくなる、というのはありますね。

男性の衣装もステキでした。特に、会長さんが着ているものは最初から最後まで美意識に貫かれていて。最初の登場シーンは全部ネイビーで統一しました。さわやかで、黒じゃないところがよかったですね。日本男性の洋装は黒とグレーが多かった時代ですから。他人と違うジェントルな美的感覚があり、いい意味で日本人離れした雰囲気から印象づけられた気がします。延さんの場合は、それほど服に構ってない感じがざりげなく出ていました。微妙にもっさりしていて、ちよっと肩がずれていたり、ネクタイもそれほど完璧じゃない。外見にコンプレックスのある彼が、彼の外見を気にかけないらしいさゆりに惹かれたことにもうまく重なります。男爵にはおしやれの最前線をやってくるつもり、という印象が出ていたし、ちゃんとキャラクターを反映するよう着こなしをさせているのが立派です。

全体的に見ると、やっぱり“着物でなければできない色の組み合わせ”というのを思いっきり遊んでいますね、アトウッドは。これはあり得ないだろう、というの、着物の世界だとあり得るし。色のダンス、ね。ありとあらゆる可能性をこの映画で試した感じを受けました。満足だったろうなと思います。豆葉のセリフじゃないけれど、この映画そのものが、まさに動く芸術品ですね。(談)

TEXT by Yuki Tomimaga

PROFILE なかの・かおり ● 服飾史家・コラムニスト。英国ケンブリッジ大学客員研究員、東京大学非常勤講師などを経て文筆業に。著書に「モードの方程式」(新潮社)、「スーツの神話」(文春新書)、訳書に「シャネル スタイルと人生」(ジャネット・ウオラック著/文化出版局)ほか多数。現在、日本経済新聞 夕刊、雑誌「Gentry」「キネマ旬報」ほかにてコラムを連載中。